

ステイプルトン家の屋敷は、なかなかの豪邸だった。

古色蒼然とはしているが、歴史の重みが建物の「格」となっている。聞けば、革命以前は貴族の住居だったらしく、それも納得できる佇まいだった。

前庭こそ狭いが、中に入れば玄関ホールは広く、天上も高い。床には埃のひとつもなく、嵌め殺しのステンドグラスや壁に掛かる蝋燭立ては、しっかりと磨き込まれている。

「良いところのお嬢さんとは思ったが……予想以上の『良家』らしいな」

屋敷を訪れたのは、コナンとアーサー。そして、依頼人となるローラと、その付き添いのサラの四人だった。最初に出迎えたのは執事らしき男性で、サラの姿を見て大層驚いていた。どうやら、少女は誰にも言わずに抜け出して来ていたらしい。

ただ、サラ曰く、

「ローラはいつもそうだよ？ 一人でベーカー街まで遊びに来るの。だから仲良くなったんだもん」

ということなので、最初の印象に反し、案外お転婆のようだった。

ともあれ、事情を話すとコナンたちは、すぐに応接室に通された。

装飾は乏しいものの、よく手入れが行き届いた部屋だ。室内はさほど寒くもなかったが、執事は暖炉に火を入れてから退室した。

ふむふむ、ときつそくアーサーが応接室を見て回る。

「この暖炉なんかも年代物だね。だが、こっちの火掻き棒は不釣り合いだな。元々あった物は手放したか。残ってる灰も……うん。かなり前の物だ。当主は出不精らしいが、客もいなかったと見える」

「アーサー。訪問して早々、失礼だぞ」

「生憎、遊びに来たわけじゃないからな。例えば――見ろ。壁紙のこの辺り。周りよりやや劣化が少ない四角いスペースがあり、小さな補修跡が――おそらくフックを外した跡が残っている。つまり、ここに長らく掛けられていた絵画が、最近外されたんだ。しかも、取り外したまま放置されている。客が来ないのはもちろんだが、資産家という噂も慎重に検証する必要がありそうだぞ？」

さすがに小声での台詞だったが、コナンは苦い顔をした。父親の失踪、また、それを気に留めない家人の反応が、だいぶきな臭く思えてきた。

と、そのときだ。慌ただしいノックに続き、若い女性が応接室に顔を見せた。

依頼人の少女を見るなり、

「ローラ！ またあなたは一人で勝手に……！ 駄目でしょ？ 何度言ったらわかってくれるの？」

「ごめんなさい。でも、私、お父様が心配で……」

「お父様は大丈夫だつて言ったじゃない！ 本当に、頑固な子ね。お姉ちゃんの言うことが信用できないの？」

「ごめんなさい……」

しゅんとして肩を落とす少女を、女性はもうしばらくにらんだあとで、腰を落とし、両腕で抱きしめた。

それから立ち上がり、気丈な面持ちでコナンたちを見つめる。

「アーサー・ホームズ様と、コナン・ワトソン様ですね？ 妹がお騒がせしてしまいました。姉の、ベリル・ステイプルトンです。事情は使用人から聞いていますが、どうかお引き取り下さい」

「お姉ちゃん！」

「黙って、ローラ。忘れたの？ お父様はいつも、余所の人を家の中に入れてはいけなかつたでしょう？ 御足労頂いたお詫びは、後日改めて致します」

ベリルは固い声で一方的に告げた。十六歳とは思えない、しっかりとした物腰だ。コナンは当惑し、アーサーは面白そうに微笑した。

そして、真っ向から反論したのは、サラだ。

「待って下さい！ ローラちゃんはお父さんが心配だから……それに、この家には魔物が出るんですよ？ アーサーくんとコナンお兄ちゃんは、魔物を退治しに来たんだよ？」

魔物退治とは初耳だ。だが、サラの抗議に、ベリルは少し表情を和らげた。

「ローラのお友達？ 妹のためにありがとう。でもね？ 私も妹と一緒に家中を捜したけど、魔物は見つからなかったわ。妹はきつと悪い夢を見て、少し混乱してしまったのよ」

「違うよ、お姉ちゃんっ。私は、本当にー」

ローラは再び訴えたが、ベリルは取り合わなかった。コナンはどうにも居心地が悪く、「……なるほど」と小さくつぶやく。たちまちサラからにらまれてしまい、ゴホゴホと咳払いした。すると、

「よろしい。貴方の言い分はわかりました、ミス・ステイプルトン。僕としても魔物退治の押し売りをするつもりはありません。ただ、幾つか伺いたいことがあるので、質問して構わないでしょうか？」

アーサーが切り出した。

ベリルがやや緊張した面持ちになり、

「……お答えできることでしたら」

「結構。まずー」

おもむろに問いかけようとしていたアーサーが、突然、口を閉ざした。

しかも、そのままひと言も喋らない。

ベリルが怪訝そうな顔になった。コナンが「アーサー？」と声をかけると、鋭く、しつ、と応じ、人差し指を立てて口に当てる。

そして、滑るような足取りで応接室のドアに向かうと、無言のまま扉を引き開けた。

廊下には、一人のメイドが立っていた。

まさに部屋に入ろうとしていたところだったらしく、

「……失礼しました。あの……紅茶をお持ちしましたので……」

と、驚いた様子で言った。その言葉通り、メイドの手には紅茶セットが載せられた黒いトレイがある。

ベリルが眉根を寄せ、

「お茶を出すような指示はなかったでしょ？ お客様はすぐにお帰りになります」

「し、失礼しました。お下げします……」

メイドが恐縮した様子で、慌てて後ろに下がる。

しかし、

「……待ちたまえ」

とアーサーが引き留めた。

少しの間メイドを観察したのち、

「ご当主の言いつけ通り、家の『中』からは早々に退散しましょう。代わりに、家の『外』を拝見してよろしいかな？ せっかくですし、淹れ立ての紅茶を頂きながらね」

*

その後、アーサーは紅茶のカップを片手に、夕暮れ前まで屋敷の庭や周辺を調査して回った。

ただ、ひと通り見て回ったあとは、あっさりとステイプルトン邸を辞して、家路についた。

「アーサーくんっ。ローラちゃんの依頼は、きちんと受けるんだよね？ いまさら断ったりしないよね？」

ベーカー街への帰り道。まだ納得の行かない様子のサラだったが、アーサーは「さて」と笑いながらはぐらかす。

「差し当たり、屋敷内の搜索は許してもらえそうにないし、踏み込んだ聞き取りも無理そうだ。外堀を埋める所から始めるとしよう」

「じゃあ、本当に依頼を引き受けるのか？」

コナンが意外そうに言った。何しろ、なんの得もない上に、アーサーの嫌いな子供絡みの事件だ。向こうが断るなら喜んで依頼を投げ出すに違いないと思っていた。

しかし、アーサーは肩を竦めてみせ、

「ローラ嬢が魔物を見たという窓の外。君は何か気付いたか、コナン？」

「いや、特に何も……ああ、待てよ。芝生に幾つか、芝が押し潰された跡があったな。君も熱心に見てたじゃないか」

「僕には『足跡』に見えた」

「足跡？ いや、しかし、靴底の跡にしては形が変だし、サイズがかなり大きいだろう。まさか、あれが魔物の痕跡だって言うのか？」

「少なくとも、ローラ嬢が見た『何か』の痕跡である可能性は十分ある。それに、あれだけじゃないぞ。何かで引っ搔いたような跡が、屋敷の壁から複数確認できた。おそらく屋根にもあるな」

「壁や屋根に？」

そう言えば、アーサーは屋敷の周辺を調べる間、何度も建物を仰ぎ見るように眺めていた。あれは、壁を見ていたらしい。

サラが大きく目を見開いて、

「きつと魔物が這いずった跡ね？ でなきや、壁とか屋根にそんなの、できっこないもの！」

「ど、どうだろうか」

鼻息を荒くするサラに、コナンは口を濁す。

一方、アーサーはニヤニヤしながら、

「もつとも、一番気になったのは、さっきの茶器のトレイだ。僕の記憶だと、あれは……そもそも、あのメイドも……案外込み入ってるのかもしれないぞ」

ほとんど独り言のように、アーサーが言った。その楽しい横顔に、コナンは彼が依頼を受けた理由を理解する。

好奇心は発想の種。その種が、芽生えたのだ。

「とっかかりとしては、あのステンドグラス辺りか……と言っても、もう遅い。明日からだな。コナン？ 今夜の夕食だが、この前話してた屋台のフィッシュ・アンド・チップスを試してみようぜ」

*